

# Andrew Lloyd Webber の *The Phantom of the Opera* における劇中歌の歌詞の登場人物の心理とストーリー進行の関係に関する研究

光 富 省 吾\*

## 序

ミュージカルで歌われる歌は、ミュージカルではない「普通」の演劇におけるセリフに代わるものである。したがって役者（歌手）が登場人物の心情を歌うのは当然である。また登場人物間で歌われる場合は、ストーリーに則った一種の会話の働きをしている。したがって歌の内容がその後のストーリー展開にも関連してくるのもまた当然のことである<sup>1</sup>。

ミュージカルの中にはその劇の進行中に、さらに別の劇が挿入されることがある。物語が二重構造になった一種のメタフィクションである。そのような劇中劇で歌われる歌詞の内容もはたして登場人物の心理やストーリー展開と関連しているのであろうか。ここではミュージカル、特に *The Phantom of the Opera* の中の劇中劇の歌詞の内容とストーリー全体の進行との関連性を考察する。

## I. 劇中歌

### 1. “The Lonely Goatherd” の場合

Oscar Hammerstein II と Richard Rogers の *The Sound of Music* (1959)

---

\* 福岡大学人文学部教授

で歌われる “The Lonely Goatherd” は住み込みの家庭教師の Maria が夜雷の音に脅える Von Trapp 家の子供達をなだめるために歌う。その意味ではこれは劇中劇ではない。さらにその牧歌的な歌詞の内容は登場人物の心理と劇のストーリー展開とは無関係である<sup>2</sup>。しかし映画版 *The Sound of Music* (1965) の “The Lonely Goatherd” は Trapp 家の子供達による父親とその婚約者 Baroness Elsa Schraeder に向けた人形劇として改変される。人形劇を上演したこと自体は瀬川裕司が「大佐がエルザを連れてきたあとの環境が落ち着いてきたこと、子供たちが歌を通じて才能を開花させていることが表現される。またそれを観たマックスが音楽祭への出演を思いつくという意味でも、重要な意味を持つパフォーマンスとなっている」(瀬川 127-28) と述べるように、子供たちの音楽の才能の発見と後の音楽祭出演の契機となり、ストーリー展開上ではそれなりの意味がある。しかしそれでもなお歌(人形劇)の内容は登場人物の心情を描き出しているわけではないし、ストーリー展開とは無関係である。

## 2. “Spring Time for Hitler” “の場合

もう一つ例を見てみよう。Mel Brooks が監督した映画 *The Producers* (1968 年) をミュージカル化し、Brooks 自らが脚本、作詞、作曲を担当した *The Producers* (2001 年) である。ユダヤ人の Max はかつてはブロードウェイの演劇界で腕をならしたプロデューサーであったが、近年はヒット作が出ず、落ちぶれている。ある日 Max のオフィスを訪れた会計士の同じくユダヤ人の Leo が失敗作だった *Funny Boy* (1964 年のミュージカル *Funny Girl* のパロディ) が初日で打ち切りになったために、投資家への配当がゼロになり、わずかながら利益が出ることに気づいた。そして二人は二重帳簿を作成し、利益を得る目的で、初日で上演打ち切りとなるミュージカルを製作することを決心した。そしてそのような作品に相応しい史上最悪の脚本と演出家を探し始める。

二人が見つけたのがナチの残党で未だに Hitler を礼賛し、ニューヨークのビルの屋上で Hitler のファーストネームの Adolf という鳩を飼育する Franz が書いた *Spring Time for Hitler* であり、助手でゲイの愛人 Carmen Ghia や個性豊かな振り付け師などと一緒に暮らすゲイの演出家 Roger である。ナチズムと男性同性愛者を表に出せばまず間違いなく失敗すると二人は考えたからである。当初は、Hitler 役は Franz が演じる予定であったが、上演前に骨折したために、セリフを全て知っている Roger が急遽 Hitler を演じることになってしまう。

開幕すると Hitler を礼賛する内容に嫌悪感を抱いた観客が次々に席を立つが、Roger 演じるゲイの Hitler が登場すると観客は一斉に笑い出し、Hitler をギャグ化したコメディであると勘違いして、席を立ち始めていた客も席に戻り、劇は大成功となり、当初の目論見は外れてしまう。結果的に二人は二重帳簿が警察にばれて、ニューヨーク州のシンシン刑務所に送られてしまう。

この劇で歌われる“Spring Time for Hitler”（とそれに挟まれる“Hail Myself”）の内容はドイツにおける Hitler 待望と Hitler 自身を交えた軍隊の行進であり、アメリカ国内、特にユダヤ人が多く住むニューヨークにおける市民の反ナチズム感情を逆なでする内容という意味では Leo と Max の意図にあっていないとはいえ、歌う Roger と Ulla の心情を歌っているわけではないし、何よりも Leo と Max の内面に迫ったものでないという意味で通常のミュージカルの曲とは異なる。

## II. *The Phantom of the Opera* の場合

それでは劇中劇で歌われる曲はミュージカルのストーリーの一部とならず、登場人物の心情を歌ったりしていないとはたして言い切れるのであろうか。

ここではパリのオペラ座を舞台にした Andrew Lloyd Webber の *The Phantom of the Opera* (1986 年) で劇中歌がはたして登場人物の心情を歌っ

たり、その歌詞の内容がその後のストーリー展開と関連したりしているかを検討してみる。

## 1. “Hannibal”

最初に1905年のオペラ座のオークション会場で幕が開き、RaoulとMadame Giryが参加している。そこで“Masquerade”のメロディを奏でるベルシャ服を身につけた猿のオルゴールがRaoulによって30フランで落札される。このオルゴールはすでに亡くなった妻のChristineとPhantomの過去との関係を暗示させるものであり、Raoulは過去へ思いをはせるが、その心境は複雑なものであることは推察できる。そしてオペラ座のシャンデリアが出品されたところから、シャンデリアは劇場の天井に向かって急上昇し（ロイヤル・アルバート・ホール版では天井に固定されたシャンデリアから火花が散る）、時代は一気に1881年のオペラ座にさかのぼる。

1881年のオペラ座の舞台ではオペラ *Hannibal* のリハーサル中で、プリマドンナのCarlottaとその相手PiangiがHannibalの帰還を歌う。この *Hannibal* の場面はGiuseppe Verdiの *Aida* (1871年)を連想させるが、Lloyd Webberが創作した架空のオペラである。ここで“Hannibal”をCarlottaとPiangiが歌う。この曲が歌われる時点ではChristineとMegはまだバックダンサーの一人にすぎない。この“Hannibal”はPiangiが演じる、ローマ帝国と戦った英雄Hannibalのカルタゴへの帰還を祝福する内容であり、CarlottaやPiangiの心理を反映しているわけではなく、*The Phantom of the Opera* のストーリー展開との関連性も見られないという意味では“Hannibal”はただの劇中歌にすぎない。

## 2. “Think of Me”

“Hannibal”のリハーサルが終了した後、支配人Lefèvreの退任と新しい支

配人 Firmin と André が紹介される。André は Carlotta に第三幕の aria を歌うことを懇願する。この aria が “Think of Me” である。この曲はオペラの中の曲であり、当然オペラの登場人物の心情を歌ったものである。ただしオペラの内容やストーリーは観客には提示されないので、どのような状況でこの曲が歌われるのかは不明である。

そこで最初に歌う Carlotta の歌詞を検討してみる。Carlotta は次のように歌う。

Think of me  
Think of me fondly  
When we've said goodbye  
Remember me  
Every so often  
Please promise me you'll try

On that day, that not so distant day  
When you are far away and free  
If you ever find a moment  
Spare a thought for me

Think of me  
Think of me warmly…

以上のようにオペラの女性主人公が過ぎ去った過去の恋の相手に私のことを思って、と歌う内容である。しかし Carlotta が歌っている途中で舞台背景が突然落下し、リハーサルは中断する。新しいオペラ座の支配人となった

Firmin と André が対応しようとするが、Carlotta は舞台を降りると言います。このような状況で Madame Girya とその娘 Meg が Christine を代役にと提案する。Madame Girya は Christine が Phantom から歌唱の訓練を地下で密かに受けていて、十分な歌唱力を備えていることを知っているからである。

リハーサル中にオーディションとして Christine は Carlotta と同じ歌詞を歌い始めるが、実力が認められたのであろう、途中で衣装を着替えて、オーディションの場面からそのままオペラ上演の本番の舞台に変わり、歌い終えて、観客からも喝采される。私が元になっている映像はロイヤル・アルバート・ホールのライブ版であるが、このコンサート・ホールの観客は 1881 年のパリ・オペラ座の観客と一体化する、あるいはパリ・オペラ座の観客と同じ視点を持つと錯覚してしまう。DVD を鑑賞している私からすればロイヤル・アルバート・ホールの観客はオペラ座の観客に見えてくる。視点の錯覚を狙った仕掛けである。

さらにオペラ上演中にその歌手が幼馴染みの Christine であることに気づいた Raoul がこの曲のメロディを歌いながら観客席から登場する。Raoul が介入することによって、幼い頃の二人の思い出（それが恋愛感情であったのかは不明である）が甦り、これが契機となり、やがて二人は結ばれることになる。この時点では“Think of Me”は過去の恋愛に対する思いを歌ったものに過ぎないが、Raoul が入ることによって、後に結ばれる Christine と Raoul のラブソングになるという意味ではストーリー展開上では歌詞の内容は大きな役割を果たしている。さらに“Think of Me”の「私」を Christine とオペラの役中人物を観客が同一視するように導き錯覚させることに成功している。この曲の「私」は劇中の登場人物でもありながら、新しく誕生したオペラ歌手のスターともなるのだ。したがって“Think of Me”は単なる劇中歌ではなく、登場人物の心情を歌い、後の劇の進行にも影響する。

### 3. “Poor Fool, He Makes Me Laugh”

“Poor Fool, He Makes Me Laugh” は架空のオペラ *Il Muto*<sup>3</sup> の挿入曲である。この曲は Wolfgang Amadeus Mozart の複数の作品のパロディとなっており、小山内は

ここでカルロッタが歌う「愚か者、笑わせるわ」は全体にモーツァルト風で、物語の状況設定は『フィガロの結婚』、「ハハハハハ」という笑い声のくだりは『魔笛』のパパゲーノの笛の音、コロラトゥーラは同じく「夜の女王のアリア」をそれぞれ摸しており、短いフレーズの中にパロディがぎっしり詰まっている。ロイド＝ウェバーのパステイーシュの才がいかに発揮された一曲だ。(小山内 46)

と述べている。

その前の “Note...Prima Donna” において Firmin、André、Raoul らは Phantom から次の公演で Carlotta を外し、Christine を主役にするようにという忠告の手紙を受け取る。Carlotta は手紙を書いたのが Raoul ではないかと疑う。Madame Giry は Phantom の言うことを聞く方が賢明であると忠告するが、Firmin らは無視する。その結果 Phantom は挑戦を宣告する。そして次に上演されるオペラが *Il Muto* である。Don Attilio がイギリスへ行って不在の間にその妻 (Countess、Carlotta が演じる) が愛人 Serafimo (男性であるが Christine が演じる) と許されない関係を持つというストーリーである。Countess は浮気がばれないように Serafimo に女装させる。元々「女性」である Christine が「男性」役になり、さらに女装するという二重の変装 (スカートの下に男性用のズボンをはいている) で、結局は元の「女性」に戻るといはいささか複雑な仕掛けである。しかし妻の態度を不審に思った Don Attilio はイギリスへ行くふりをして、Countess と Serafimo を目撃する。曲のタイトル

にある“Poor Fool”とはDon Attilioのことであり、Countessと使用人たちのコーラスによって、“Poor Fool, He Makes Me Laugh”と嘲笑的に歌われる。そこに自分の席は空けておくように忠告したのに約束を守られなかったことに怒ったPhantomの声が聞こえてくる。そしてCarlottaがChristineを“toad”呼ばわりしたことから、逆にPhantomはCarlottaの声をヒキガエルの声に変えてしまう。舞台は中断し、再開するまでの間“Poor Fool, He Makes Me Laugh”のメロディでMegらによるダンスが観客に上演されるが、その演奏中に舞台係Bouquetの死体が舞台上に吊るされる。その前にBouquetがPhantomを嘲笑したことに對してPhantomが怒ったからである。その後ChristineはRaoulとオペラ座の屋根に逃れ、“All I Ask of You”でPhantomとの恋愛をRaoulに語る。RaoulはChristineを守ると誓うが、それを聞いたPhantomは怒り狂い、同じメロディでRaoulへの復讐を誓う。

“Poor Fool, He Makes Me Laugh”はこのように喜劇のオペラの中の1曲である。“Poor Fool, He Makes Me Laugh”の内容はDon Attilio、その妻Countessとその愛人Serafimoの三角関係を歌ったものであり、その意味では*The Phantom of the Opera*という劇のChristineをめぐるPhantomとRaoulの関係と相似の関係となっているが、“Think of Me”とは異なり登場人物の心理を反映しているとは考えられない。

#### 4. “Masquerade”

“Masquerade”はあくまでも登場人物らが開く華々しい行事であり、厳密な意味ではオペラ座で上演される劇中劇ではない。しかしこのミュージカルで演じられる3つのオペラが過去のオペラのパロディであることと同様に“Masquerade”もVerdiの『仮面舞踏会』(*Un Ballo In Maschera*, 1859年)のパロディであること、“Masquerade”が演劇的な祝祭性に満ちていることと後で述べるようにPhantomの住む地下の闇世界へと通じる要素があることで



あえてここで取り上げる。

Phantom が姿を消して半年後の大晦日、新年を祝う仮面舞踏会が開催される。オペラ座の出演者と関係者が歌って踊るイベントである。この“Masquerade”について、小山内は「怪人にとって仮面は醜い素顔を隠すための、悲しみと虚飾のシンボルだ。晴れがましい周囲と対比的に、怪人の孤独な心が浮き彫りにされる。」(小山内 48) と述べて、華やかな祝祭と Phantom の孤独な魂のコントラストを指摘している。劇の最初のオークションで猿のオルゴールが競売にかけられるが、そのメロディが“Masquerade”であり、同じ曲によって喚起される感情のコントラストが際立つのである。

“Masquerade” の歌詞は以下のようにになっている。

Masquerade! Paper faces on parade  
Masquerade! Hide your face so the world will never find you  
Masquerade! Every face a different shade  
Masquerade! Look around, there's another mask behind you

Flash of mauve, splash of puce  
Fool and king, ghouls and geese  
Green and black, queen and priest  
Trace of rouge  
Face of beast  
Faces

Take your turn, take a ride  
On the merry-go-round in an inhuman race  
Thigh of blue, true is false  
Who is who?

Curl of lip, swirl of gown

Ace of hearts, face of clown, faces

Drink it in, drink it up till you've drowned

In the light, in the sound but who can name the face?

映像で確認できるがカラフルな色彩の衣装、仮面をつけることによって誰が誰だかわからなくなる匿名性、そしてその匿名性によって別の人格に変身できる非日常性といった華やかな祝祭的空間が展開される。

しかしながら“Masquerade”で歌われるのは祝祭的華やかさばかりではない。“true is false”、“Who is who?”のような非論理性、不合理性は Phantom の地下室が持つある種の闇とも通じるものがある。

“Masquerade”の途中で“Think of Me”のメロディで Christine と Raoul はちょっとした諍いを引き起こす。Christine は二人が婚約したことを秘密にしておきたいと考えるのに対し、Raoul はなぜこそこそとしなければならないのか理解できないので、Christine を問い詰める。Christine が婚約のことを秘密にしておきたいと考えるのは言うまでもなく Phantom に知られたくないからである。Raoul と婚約しながらも、まだ Phantom への思いが残っていると考えられる。Christine にとって Phantom は「父」であり、歌唱を指導する「音楽の天使」<sup>4</sup>でもあるのであるが、Christine が“Think of Me”を歌い終え、オペラのニュースターとなった後、タイトル・チューン“The Phantom of the Opera”を歌いながら、二人がボートで地底のたくさんの蠟燭の官能的なゆらめきの中を進む時の Christine の陶醉した表情に見られる恍惚感、エクスタシーから Christine にとって Phantom は恋愛あるいは性愛の対象でもあったことが理解できる。

ところで仮面の下には「素顔」があるのであるが、仮面と「素顔」の関係は、実はオペラ座と Phantom が蟄居する地下にも同じような関係、表層と深層と

いう二重構造を指摘することが可能である。仮面とオペラ座のステージが表層であるとすれば、「素顔」と地下が深層ということになる。「地下は意識下に通じ、情念や美意識が剥きだしになる」(小山内 45) と小山内が述べるように、地下は理性では払いきれない欲望とエロティシズムに満ちているのである。ただし「素顔」は通常は法律と慣習などによって抑制されている。しかし仮面舞踏会のような非日常の祝祭的空間において仮面によって素顔が隠されることによって逆に「素顔」は本性を剥きだしにしてしまう。

“Masquerade” は厳密な意味での劇中歌ではない。しかし猿のオルゴールがこの曲のメロディを奏でることを考えると仮面舞踏会の華やかさの奥に Phantom の持つ地下の情念と孤独な魂が浮かび上がってくる。その意味ではこの場面はこのミュージカル全体のテーマと密接に関連しているのではないか。

以上のように“Masquerade”の表面上の華やかさの下には Phantom の孤独が潜んでいるという意味ではこの“Masquerade”の歌とダンスは作品全体のテーマと関連している。

## 5. “The Point of No Return”

“Masquerade”の場面で歌って踊って、祝祭が最高潮に達した時 Red Death の仮面を身につけた Phantom の登場によって、舞踏会は中断され、一瞬にして緊張感が舞台にみなぎる。そして Phantom はオペラ *The Triumphant of Don Juan* を作曲したと宣言し、Christine を主演にして上演するように迫る。Raoul らは上演を受けることを装って逆に Phantom を捉えようと画策する。Phantom は *The Triumphant of Don Juan* 上演中に Piange を殺害し、顔を含めて全身を黒い衣装で固めて自ら Don Juan に扮し劇中で Christine に求愛する。その時に歌われるのが“The Point of No Return”である。タイトルからも推測できるように、*The Triumphant of Don Juan* は Mozart の *Don*

*Giovanni* (1787 年) のパロディとなっている。

Aminta を演じる Christine は Don Juan を Passarino であると思い込んでいる。A であると思い込んでいる人物が実は A ではないということだ。ここに Lloyd Webber の仕掛けがある。さらに Aminta (Christine) が Passarino であると思い込んでいる人物が実は Phantom であるということだ。“the trap is set and waits for its prey” と歌いながら、Passarino に扮した Don Juan は Aminta を誘惑しようとする。しかし実際は Passarino = Don Juan に扮した Phantom が Christine をそのままオペラ座のステージからファントムの住処の地下へと誘惑しようとするのである。

Passarino の服装をした Don Juan がステージに再登場する時のト書きは以下のようにになっている。

Passarino leaves. CHRISTINE (AMINTA) enters. She takes off her cloak and sits down. Looks about her. No-one. She starts on an apple.

The PHANTOM, disguised as DON JUAN pretending to be PASSARINO, emerges. He now wears PASSARINO's robe, the cowl of which hides his face. His first words startle her. (CD ブックレット 56 下線部筆者)

Passarino の声を聞いて Christine は驚くが、これは Christine が Don Juan が実は Piange ではなく Phantom であることに気づいたことを意味する。Phantom は次のように歌いながら Christine に迫る。

DON JUAN (PHANTOM)

You have come here

In pursuit of your deepest urge

In pursuit of that wish which till now has been silent

Silent...

I have brought you

That our passions may fuse and merge

In your mind you've already succumbed to me

Dropped all defenses, completely succumbed to me

Now you are here with me, no second thoughts

You've decided, decided

Past the point of no return

No backward glances

Our games of make believe are at an end

Past all thought of "if" or "when"

No use resisting

Abandon thought and let the dream descend

What raging fire shall flood the soul

What rich desire unlocks its door?

What sweet seduction lies before us

Past the point of no return

The final threshold

What warm, unspoken secrets will we learn

Beyond the point of no return?

これは *The Triumphant of Don Juan* というオペラの挿入曲で、表向きは劇中劇の曲であり、文脈がないのでわかりにくいですが、それでもなお Don Juan と Aminta が差し迫った関係であり、二人の関係が後戻りできないほど高まっていることが読み取れる。Don Juan と Aminta 二人の情熱が溶け合っ

となり、Aminta は頭の中で Don Juan に屈服している。つまり Don Juan が Aminta を精神的に支配している。考え直したり、もし、あの時などと考えることは終わりにして、夢に任せようというように、エロスに満ちた官能的な世界へ Aminta を誘い込んでいる。この劇中歌を書いたのは Phantom であり、もともとこのようになるように設定していたと考えれば、Don Juan が歌う歌詞は Phantom の本音でもあり、劇中の罫は現実の Christine に対する罫でもあり、Christine を再び自分のものにしようとして発した言葉であると考えられる。見ている客も Piange ではなく Phantom が Don Juan に扮していることに気づいているからこそ、Don Juan=Phantom の歌が持つ重層的な意味を味わうのである。後戻りできないところまで来てしまったと歌う歌詞に Phantom が Christine を取り戻そうという決意が感じられるのである。

一方 Aminta (Christine) の歌詞はどのようなものであるか。

Aminta (Christine)

You have brought me

To that moment where words run dry

To that moment where speech disappears into silence

Silence

I have come here

Hardly knowing the reason why

In my mind I've already imagined our bodies entwining, defenseless and silent

And now I am here with you, no second thoughts

I've decided, decided

Past the point of no return

No going back now  
Our passion play has now at last begun  
Past all thought of wright or wrong  
One final question  
How long should we two wait before we're one?

When will the blood begin to race  
The sleeping bud bursts into bloom?  
When will the flames at last consume us?

あなたは私を言葉が沈黙へと消滅していく世界へ連れてきた、私は理由を知らずにここへ来てしまった、心の中では二人の肉体が絡み合うことを想像している、今私はあなたとここにいる、考え直すことはない、決心しているのだから、情熱の劇は始まったばかりと Aminta は Don Juan の愛を受け入れる覚悟を示しているし、Aminta が歌う内容は官能とエロスに満ちた世界に満ちている。

オペラ歌手 Christine は Aminta に扮して、Phantom が予め準備した歌詞を職業的に歌っているだけかも知れない。しかし Christine は Don Juan であることも知っている上で陶醉の表情を浮かべているのである。Christine は Raoul の前では Phantom を否定しながらも、Phantom のことを完全に否定しているわけではない。前にも述べたように Christine は Raoul と婚約したことを公にしたくなかったことに見られるように、表面的には否定しながらも、どこかで惹かれているところが見て取れる。さらにこのミュージカルの続編 *Love Never Dies* (2010 年)<sup>5</sup> の Christine の息子の父親が Raoul ではなく Phantom であったことを考慮に入れると Christine が Phantom の愛を受け入れていたことは否定しがたい。実在しない、架空のオペラ座の観客だけではな

く、ロイヤル・アルバート・ホールの観客もこの曖昧さによって緊迫した二人の関係を楽しむのである。

二人でもう引き返せないところへ来てしまったとデュエットするが、突然 Christine は Phantom のマントの頭部を剥がす。そして Phantom は "All I Ask of You" のメロディで Christine に対して自分に愛を注ぐように懇願するが、Christine はさらに Phantom の仮面を剥ぎとる。興奮した Phantom は Christine を地下へ連れていく。舞台上では Piange の死体が見つかり、オペラ座内部は騒然とする。地下では Christine は Phantom に "It's in your soul that the true distortion lies" と言って、Phantom に訣別のことを告げる。

Phantom が歌う "Don Juan" の歌詞の内容は Phantom の真情を吐露するものであり、劇進行に関連していると言える。それに対して Christine のパートは役柄の歌詞にすぎないが、Christine の Phantom に対する感情は複雑であることを考慮すると、Christine の内面の感情を歌ったものではないと断定はできない。

### III. 結論

以上みてきたように、The Phantom of the Opera というミュージカルにおける劇中歌は曲ごとに異なる特徴を有していて、次のようにまとめられる。

1. "Hannibal" と "Poor Fool, He Makes Me Laugh" の歌詞の内容は登場人物の心理とストーリー展開とも関連性がない。
2. "Think of Me" の場合、登場人物の心理を歌い、ストーリー展開とも関連している。
3. "Masquerade" の内容は登場人物の心理とストーリー展開とも関連性はないが、その内容は逆に Phantom の孤独な心情を映し出しているという意味では作品全体のテーマと関連していると考えられる。
4. "The Point of No Return" においては、Phantom のパートは Phantom



の心情、本音を歌い上げているが、Christine が歌うパートは曖昧さが残る。

5. Carlotta と Piange という脇役が歌う曲は登場人物の心理と劇のストーリー展開とは無関係である。それに対して主役になる Phantom と Christine が歌う曲は登場人物の心理を歌い、ストーリー展開とも関連している場合がある。

### 注

- <sup>1</sup> しかしながら現在当然であると考えられている歌詞の内容とストーリー展開の関係がかつては必ずしも関連していなかったのである。ブロードウェイの劇場で上演されていた初期のミュージカルあるいはレビューではストーリーと歌には関連性がなかった。あるいは初期のミュージカルにはそもそもストーリーらしいストーリーは存在しなかったのである。

歌詞の内容がストーリーと密接に関連する現在のミュージカルの原型となったのが Florenz Ziegfeld Jr. が 1927 年に製作し、Oscar Hammerstein II が脚本と歌詞を書いた *Show Boat* である。

*Show Boat* の革新性について井上一馬は次のように述べている。

それまでのミュージカル、すなわちミュージカル・コメディは、ほとんどストーリーらしいストーリーのないダンスに重きを置いたものか、ストーリーがあってもその大半は、アメリカ産の minstrel や vaudeville のショー、あるいはヨーロッパの farce (仏) 笑劇 から取り出してきたような寸劇でいどのものだった。しかもそのストーリーの大半はシンデレラ物語だった。

しかしこの『ショー・ボート』では、初めて本格的なストーリーが盛り込まれたうえ、そのストーリーは、人種問題や結婚生活の破綻といったシリアスな社会問題を扱っていたのである。そのため『ショー・ボート』では、登場人物の個性もしっかりと描かれていた。

すなわちこの作品によってブロードウェイには、それまでのミュージカル・コメ

ディに代わって、よりシリアスなミュージカル・プレイが生まれたのである。

そしてこれによって、アメリカのミュージカルには新しい地平が切り拓かれ、この作品以降、ミュージカルの製作者たちは、ストーリーを重視し、曲と詞を使ったいかにストーリーを展開していくべきかを考えるようになったのである。すなわちこの作品から、ストーリーと音楽の一貫性、融合性の方向がはっきりと打ち出されたのだ。それ以前のミュージカルでは、簡単なストーリーと歌と踊りは、それぞれ別々のものとして、一つの作品の中でその魅力を発揮していたのである。(井上 97)

このように現在では一部のレビューというショー形式を除いて、ほとんどのミュージカル作品は歌詞の内容とストーリー展開が密接に関連していると考えられる。

<sup>2</sup> この人形劇の内容について瀬川裕司は、

人形劇および歌詞の内容は、映画全体の物語とは関係がない。高地で山羊を飼って暮らす青年がいる。彼のヨーデルは遠くの町まで届き、かわいい娘がヨーデルで返事をしたところ、それを山羊飼いが聞いてふたりは結ばれる、という他愛ないものである。(瀬川 125)

と述べている。

<sup>3</sup> イタリア語のタイトル *Il Muto* をそのまま英訳すれば “The Mute” となり、「ものを言わない人、ものが言えない人」の意味になる。この劇の場合、物陰から妻の不倫を見ていながら、何も言えない Don Attilio を指す。また役の上でセリフ（歌）のない Serafimo (Christine) をも指している。実際に混乱の際に口をはさんだ Christine に対して Carlotta は “You cannot speak…Your part is silent” と忠告している。

<sup>4</sup> Christine は “Angel of Music” で

Father once spoke of an angel  
I used to dream he'd appear

Now as I sing, I can sense him...

And I know he's here...

Angel of Music!

Guide and guardian!

Grant to me your glory!

と歌っている。父親を幼い時に亡くした Christine にとって Phantom は「父」であり「音楽の天使」なのであり、小山内が「クリスティーンの潜在的な思慕が、父親（墓場）と怪人（地底湖）と、いずれも地下に向かう点で、空間的にも重ねられている」（小山内 43）のである。そしてこのことが、Christine が醜い Phantom に惹かれる理由となっている。

- <sup>5</sup> *The Phantom of the Opera* というミュージカルは醜い素顔のせいで地下でしか生きられない Phantom の孤独な精神をテーマとした作品である。そして Christine が Raoul を選択することによって、Lloyd Webber 版では Phantom の孤独な精神は癒されることはない。おそらく Lloyd Webber もその点を自分で不満に思っていたのであろう。そこで Lloyd Webber は Frederick Forsyth に続編の執筆を依頼する。しかしながら Lloyd Webber は Frederick Forsyth が書いた続編 *The Phantom of Manhattan* (1999 年、『マンハッタンの怪人』) には満足せず、そこからヒントを得ながらも *Love Never Dies* という続編を制作する。Phantom、Madame Giry と Meg の親娘の 3 人はパリからニューヨークへ渡り、コニーアイランドで興行しているという設定になっている。そこに Raoul、Christine、その夫婦の息子の 3 人がやってくるという展開である。しかし夫婦の息子は音楽の才能があり、Phantom はその子が Raoul の子ではなく、実は自分の子供であることを知ってしまう。そして最後に Christine の愛を得ることで Phantom の苦悩は解消されるのである。

## 参考文献

- 井上一馬 『ブロードウェイ・ミュージカル』 文藝春秋, 1999.  
小山内伸 『進化するミュージカル』 論創社, 2007.

瀬川裕司 『「サウンド・オブ・ミュージック」の秘密』平凡社, 2014.

フォーサイス、フレデリック 『マンハッタンの怪人』篠原 慎訳 角川文庫, 2002.

## CD

*The Phantom of the Opera : The Original London Cast.* Polydor, 1992.

## DVD

*Andrew Lloyd Webber's The Phantom of the Opera at the Royal Albert Hall in  
Celebration of 25 Years.* ジェネオン・ユニバーサル・エンターテイメント, 2012.

*The Sound of Music.* 20世紀フォックス・ホームエンターテイメント・ジャパン株式会社,  
2005.

*The Producers.* ソニー・ピクチャーズ・エンタテインメント, 2006.

*Love Never Dies.* ジェネオン・ユニバーサル・エンターテイメント, 2012.